

#001	山陰～鳥取・島根 神々のふるさとを旅する	p.01
#002	[よくわかる！PC基礎講座⑤] 橋のかたち	p.09
#003	PCのニューフェイスたち	p.10
#004	PCニュース～北から南から～	p.42

社会を支えてくださるすべての方々に 感謝を申し上げます

新型コロナウイルス感染症のリスクと闘いながら、
命と暮らしを守ってくださっているすべての方々へ
心から感謝を申し上げます。

謹んで豪雨災害の お見舞いを申し上げます

「令和4年8月3日からの大雨等による災害」で
お亡くなりになられた方のご冥福を
お祈り申し上げますとともに、
被災された皆さまへ心よりお見舞い申し上げます。

表紙のイラスト／志津見大橋

「山陰～神々のふるさとを旅する」で訪ねた、神戸川（斐伊川水系）にかかる志津見大橋をイラストに描いたものです。



広報誌の名称について



は

コンクリート(C)にプレストレス(P)の力が
作用した様子を表現したもので、
「プレス」は定期刊行物を意味しております。

島根県に降る雨は、「えにしづく
(縁雫)」と呼ぶらしい。

宍道湖、中海に挟まれた水の都と
呼ばれる松江に、「きつと出雲におわ
す縁結びの神様たちが降らせている
雨だから」と女子高生たちが名付け
たのだとか。なんてみずみずしい感
性だろう。梅雨入り直前の6月、雨の
予報とにらめっこしながら到着して
耳にした言葉に、少し反省した。いか
に効率よく快適に旅をするかに気を
取られて、緑深くけふる雨だれの風
情を愉しむ心を忘れていたようだ。

山陰 志津見大橋

山陰 志津見大橋

さて、えにしづく予報の山陰地方まで足を伸ばしたのは「昭和・平成のオロチ退治」なんて冒険心うづくキーワードを耳にしたから。調べてみると、島根県東部〜鳥取県境港・米子を流れる斐伊川ひがわによる水害を食い止めるため、宍道湖、中海を通って日本海へ注ぎ、幹線流路153km、流域面積2070km²に及ぶ斐伊川水系全体を整備する治水計画をそう呼ぶそう。近世、中世、古代と史料をさかのぼってみると、過去何度も氾濫が起き、住む人を脅かし、時の領主を悩ませてきたと分かる。一方、古事記には肥河ひがわ（現在の斐伊川）に棲みついたヤマタノオロチを見事退治して、いけにえにされかけていた美しきクシナダヒメを助け、めでたく結ばれたスサノオノミコトの伝説がある。これはもしかして、オロチは暴れ川のとえだつたりするのかしら。だとしたら、どうやら神々の世からこのあたりはずっと水と戦ってきたらしい。この勇猛な英雄譚になぞらえられるほどのプロジェクトが、私の生きている今繰り広げられているですつて？そして水の流れる所には、間違いないPC橋が存在する。これはこの目で見届けねばならないでしょう、といそいそ旅支度を始めた。いざ、神話が生まれ、神々の戦いを今も受け継ぐ地へ。

▼ 志津見(しづみ)大橋

全長280m、国内初の変断面複合トラス橋。複合トラス断面とPC箱桁断面の連続構造への挑戦は世界初。平成17年度PC技術協会作品賞、平成19年度土木学会デザイン賞受賞。

山陰 鳥取 島根

神々のふるさとを旅する

天へ向かいそびえ立つ 出雲大社の国旗掲揚塔

出雲に足を踏み入れたなら、早速出雲大社へご挨拶しなくてはならないだろう。まずは大社から車で5分ほど東の稲佐の浜へ。毎年10月の「神在月」^{かみありつき}に、八百万の神々を迎えるこの浜の砂を、境内のとある場所にお納めするというお参りのしかたに倣おうと思うのだ。と、どうしてこんなところにあるのかと異質ささえ感じる岩山、弁天島が目に行く。オオクニヌシノミコトが



▲ 出雲大社
縁結びの神様として知られる大国主命を主祭神とし、御利益を求めて多くの参拝者が訪れる出雲を象徴する古社。通常の神社と異なり「二礼、四拍手、一礼」がお参りの作法。

高天原に国を譲ったという国譲り神話で、タケミカヅチノミコトは高天原から稲佐の浜に降り立ったというけれど、案外この島が目印だったんじゃないだろうか。きつと空からでも目立つもの。

ちなみに、島根にもルーツを持つ漫画家・水木しげる先生は、実際の国譲りはこんな平和なもんじゃなかったろうと漫画「水木しげるの古代出雲」で語る。スサノオの子孫たちが築いた出雲王朝を、大和王朝が奪いに来たのではないか、国譲り神話とは、それを美談とするために編纂された神話ではないか。と。その漫画を描くきっかけが、夢枕に立った出雲の青年に頼まれたから、というエピソードがまた、人と人でないものの間(あわい)を描き続けた先生らしい。

ともあれ「国を譲る代わりに天に届くほどの社を造ってほしい」というオオクニヌシの願いを受けて造営されたのが出雲大社だ。改めて大鳥居から参道に入った。濃紫のかきつばたが青々とした神苑の中で花をつけ、八雲山や亀山にはもやがかかっている。その厳かさに、神域に足を踏み入れたのだというのを感じて、ひとつ大きく息をついた。

現在の御本殿は江戸時代中期に造られたもので、高さ24m、最古の神社建築様式である大社造。古代、少なくとも

も平安時代は高さ48mの壮大な神殿だった。当時の巨大建築物ランキングでは「雲太、和」「京三」との言葉が残されており、第3位京都の大極殿、第2位奈良の東大寺大仏殿、堂々たる第1位が出雲大社なのだ。国一番の高さを保つことが、国を渡したオオクニヌシのプライドだったのかもしれない。

さて、出雲大社に来たなら、大注連縄の前に建つ国旗掲揚塔は見逃せない。実はPC構造なのだ。分割したプレキャストコンクリートの円筒部材を積み重ね、それぞれをPC鋼棒で連結して造られている。差し棒を伸ばした状態の形状を言えば分かりやすいだろうか。塔の根本は両手を回してもはるかに届かないほどの直径で、天高く伸びる姿はPCのご神木



▲ 稲佐の浜と弁天島
出雲大社から西に800mにある砂浜。浜辺の奥には国譲り交渉が行われたという屏風岩があり、浜から南へと続く菌の長浜は島根半島を引き寄せた国引き神話の舞台でもある。



▲ 素鷲社
出雲大社の主祭神・大国主命の父、須佐之男命を祀る社。床縁下の木箱の御砂を家や田畑に撒くと厄除けのご利益があるとされる。

▶ 国旗掲揚塔
平成15年に建てられたPC造の塔。高さは平安時代の本殿より低い47m。掲揚される国旗は13.6m×9mと、量約7畳分の大きさ。明治の出雲大社宮司・千家尊福の俳句版が残る。



のよう。古から受け継がれた巨大物を作る技術と、現代技術を駆使した巨大な塔を同時に見ていると、人間の弛みない努力の軌跡を目にしているようで心が震えた。

最後に稲佐の浜でいただいた砂を納めに、本殿の背後で境内全体を見守るように建つ素鷲社（スサノオを祀る社）に向かう。代わりに床縁下にある御砂を持ち帰り、庭や縁の下に撒けば神様のご加護をいただけるそう。今回の旅、あなたの逸話をきつけかけにきました。どうか最後まで見守ってください、と手を合わせる…。境内を出て車を発進させた直後、ほんの10秒とんでもない大雨に見舞われたのだけど、歓迎いただいたということはいいかしら？

斐伊川放水路の調整弁 6つのアーチの神戸堰橋

出雲そばで腹ごしらえしたら、神戸



▲ 荒木屋(出雲そば)
創業240年以上の老舗蕎麦屋。いずれも神在祭で振舞われたものが発祥とされる石臼挽きの出雲そば、出雲ぜんざいを一度に味わえる縁結び天セットはおみくじとご縁袋付き。

川にかかる神戸堰橋へ。このすぐ上流に、「平成のオロチ退治」の主要プロジェクトのひとつとして完成した斐伊川から神戸川に水を逃す「斐伊川放水路」が開削されたため、可動式ゲートを備えた神戸堰はもしまの時の水量の調整弁を担う。その管理通路として堰の上部に架けられたのが、PC6径間連続箱桁橋が神戸堰橋だ。堰の川下にはいくつものカーブを描きながら堤が設置してあり、川の水をきらきらと変化させる。橋のアーチとともに川にレースをつけたみたいで、なんだかおもしろい心のある橋だ。どうかこの先も荒れることなく、このどかできしゃれた姿のままいてくれますように。

スサノオが眠る 不思議に満ちた地

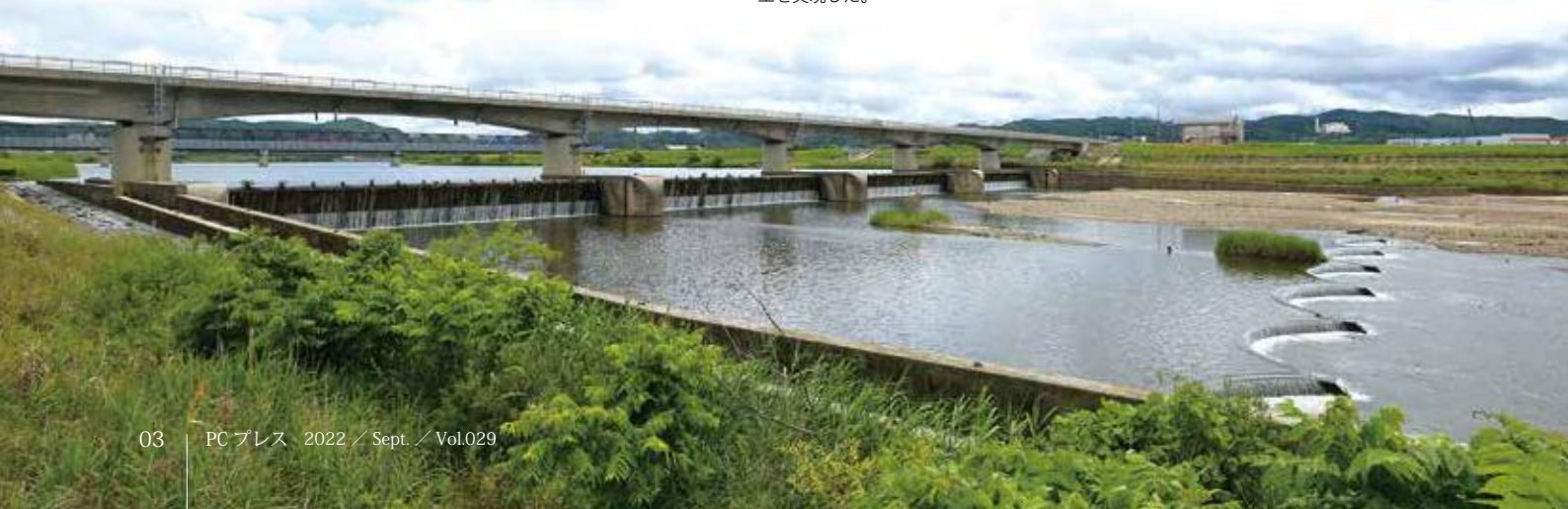
ここから神戸川を遡る。国道184

号線を南に向かつて車を走らせると、どんどん水の透明度が増していく。柱のような巨岩がせり出すあたりは名勝・天然記念物に指定されている立久恵峡だ。今は青々とした葉を茂らせる木々は、秋になると渓谷を染め上げ、紅葉狩りの人でにぎわうのだそう。30分ばかり山道を進むと、ひっそりとした須佐神社に到着する。スサノオが生涯を終えた地と伝わる場所だ。共に祀られているクシナダヒメとともに静かに眠っているのだろう、この静寂を妨げてはいけないと思わせるぴりりとした空気が漂う。

この神社には、スサノオが井戸から潮水を汲みこの地に撒いたとされる「塩ノ井」がある。境内の井戸は稲佐の浜に続いており、満潮の時は地面に潮の花が吹き、かすかに塩味がするというのだ。あそこからけつこうな標高まで登ってきたと思うけど、どういうこと？ 試みに汲んで舐めてみたところ、この日はむしろ甘くすら感じた。ここからは想像だけれど、他にも水にまつわる不思議が残っているし、何よりヤマタノオロチを退治した人だ。水脈に通じ、治水や井戸掘りに長けた方だったのではないかしら？ 知識を生かして人を助け、神様と呼ばれるようになった、とか。神話の豪快なイメージも素敵だけれど、そんな古代の技術者・スサノオ像も私は好きだ。

▼ 神戸堰橋

内・外ケーブルを併用した全長293.4mのPC橋。架設桁を渡して片持ち架設を行うことで、水量の増大する出水期の資材供給を容易にし、通年施工を可能に。短期間での施工を実現した。



平成オロチ退治の最上流 複合トラスの志津見大橋

須佐神社から山あいを走ること30分、ふと空が広くなった。空中を走るような開放感。グリーン欄干が山々にとけこみ、人工物の異物感があまりないのだ。溪谷の底まで下ると、上下の床版コンクリートを支えるように組まれたグリーントラスが印象的な志津見大橋のすらりとしたシルエットが姿を現した。しかも景観賞を受賞しただけであり、山と山のあいだになじんでいる。

「平成のオロチ退治」の上流域計画、志津見ダム。このプロジェクトは、まずダム建設によりルートが変わる道路を付け替えることや山の中に資材を運搬する道路を敷設するところから始まったという。

工事さえ準備の準備みたいなところからの着手なのだから、昭和にオロチ退治計画がスタートしてからの橋ができるまでに、どれほどの月日がかかったことか。発案者もはや引退されているだろう。その後世のため人のため、次の世代へバトンを繋いできた結果がここにある。志津見大橋の足元には、可憐なポピーの花畑が広がっていた。そこに作業用道路を作業車が埃を上げて走っていた影は見当たらない。秋は

一面にコスモスが揺れるスポットとしてじわじわ人気が出ていて、SNSに投稿される華やかな写真の背景には志津見大橋が写るものもある。川辺でなんの憂いもなくシャッターを切る人たちの笑顔は、きつとこのプロジェクトに関わる人たちが心から望んでいるものだろう。

神の湯でめざせ美肌美人 洋館で優雅に始まる朝

1日目は玉造温泉で疲れを癒した。それにしても、一度入れば姿かたちがたいそう美しくなると伝えられる神の湯は伊達じゃない。温泉のうるおい成分含有量が日本一だと、製薬会社の研究で証明された源泉で、パックしたお肌はびっくりするほどもちもちで、メイクのノリが過去最高！ウキウキと車をスタートさせた。

2日目は宍道湖の反対側へ。宍道湖沿いに車を走らせ松江市内へ。ぶかりと湖面に浮かぶ嫁ヶ島や島根県立美術館のあたりは夕日スポットだ。えにしく確率は今日も50%なので、すべてがオレンジ色に染まる景色は今回おあずけみたい。松江城に到着すると、二の丸にある亀田山喫茶室へ。ペールグリーン洋館「興雲閣」の一角を利用したクラシカルなカフェで注文したのは、SNSで見か

けて気になっていたふわふわのフレインチトースト。朝からぜいたくな気分になる。

交通の要衝に築かれた 当時の姿を残す松江城

築城当時の姿を残す松江城。ただけれど、城の周囲は現代までいぶん様変わりしている。城を築いた亀田山の周囲は、当時多くは湿地帯だった。宍道湖と中海に挟まれたほぼ標高ゼロの場所だ、そりゃさうだろう。ただ古代から水運は盛んで、宍道湖・中海を使って出雲国内の物流を担い、朝鮮半島との交易もあつた。水陸の交通の要衝である松江付近は、鎌倉〜室町時代には、松江市役所や先ほど通った県立美術館付近は、すでに港湾都市として街を形成していたらしい。商売の中心地と言える場所だ、居城を築くわけである。城自体はすごく好戦的というか、戦仕掛けがこれでもかと作られていて心が躍る反面、商業地や港が焼け野原になる覚悟もしていたのだろうなあ：とも思うけれど。

今天守の最上階から見える景色は、ほぼ築城の傍ら整備した城下町だ。残



◀ 松江城

慶長16年、堀尾吉晴によって築かれた、山陰唯一の現存12天守のひとつ。望楼型天守閣は石落しや鉄砲狭間など仕掛けにあふれた実戦的な城で、平成27年に国宝指定。



▲(上)興雲閣
明治36年、松江市工芸品陳列所として建てられた洋館。明治天皇の行在所として造られたため、細部まで華麗に装飾されている。後年、皇太子(のちの大正天皇)行幸の際迎賓館として使用。



▼(下)亀田山喫茶室のフレンチトースト
興雲閣1階にある喫茶店。クラシック音楽が静かに流れる明治の趣を残す空間で、オリジナルブレンドのコーヒーや手作りの日替わりケーキ、昔懐かしの洋食などが楽しめる。

念ながら初代大名家の堀尾氏は三代で断絶し、後を継いだ京極忠高も、着任3年余りのうちに斐伊川に若狭土手を築くなど(つまり江戸時代も斐伊川は暴れていたのでしょうか)、切れ者ぶりを発揮したが病没。徳川家康の孫である松平直政がやつてくる。親藩に預けたということは、江戸幕府もこの地を重要視していたのだろう。

江藩は中でもひどかったらしく、六代藩主松平宗衍むねのぶの時代には「出羽様(宗衍)御滅亡」のうわさが江戸で流れたとか。決して彼らが贅沢をしたからではない。宗衍の父・宣維の時代から冷害に干ばつ、水害が多発。度重なる飢饉の中、江戸から遠い松江藩には参勤交代の負担も相当なものだったろう。そこで宗衍は「御趣向の改革」、その子七代藩主治郷はるゆき(不味公)は「御立派の改革」に着手し、藩内の産業振興・育成を推進する。古から培ってきた製鉄技術に付加価値をつけ、鍋釜として売る。ハゼノキ育成を拡大し、ろうそくにして売る。新産業の研究を後押しし、30年以上もかかってようやく栽培に成功した薬用ニンジン人参を売る。国内はもちろん、清にも売る。外貨を稼ぎまくった松江藩は見事財政再建に成功し、治郷が茶器を買集められるくらい裕福になった。ちよつとコツを伝授していただきたい。

外貨稼ぎを可能にしたのは、機動力抜群の水運だ。貿易用の積荷確認が行われていた大橋川の渡船場は船員たちの家でにぎわい、そこには力士たちが住んで後輩の指導に当たっていたという。豊かゆえに文化・スポーツが発展し、強豪力士のほとんどは松江藩が召し抱えていたのだとか。昨夜旅館で堪能した宍道湖七珍もこのころから食卓に上り、船で運ばれ出雲国内に広がり始めたらしい。今私が享受しているものは、舟の道あつてこそ。ごちそうさまです。

急な中海大橋を越え 人参が育つ大根島へ

宍道湖畔の松江城から20分ほどで中海側の大橋川河口へ。ここに架かるのが中海大橋だ。外海からやってくる船、出ていく船を航行させるために、実は「ベタ踏み坂」として有名な江島大橋より急な坂道になっている。この橋ができたことで、「矢田の渡し」を使って通勤通学していた人が陸路のみで行けるようになったという。農道として整備されたそうなのだけど、中海に浮かぶ大根島こそ、松江藩の救世主・薬用ニンジン人参の畑が今も残る島なのだ。

中海を不自然なほどまっすぐ通る国道を進む。これは戦後の食糧不足から農地拡大政策がとられたとき、中海を干拓するために築かれた堤防だそう。米が余るようになって計画は中止したようだけど、中海の北側をぐるりと囲む海の道だけが残った。いらぬものが残った、と言う人もいるだろうけれど、私は大のお気に入り。海面が近く、海上ドライブ気分を味わえるから。

▼中海大橋
大橋川を中海の河口で南北に繋ぐ農道で、全長555mのPC多径間箱桁橋。航行する船を妨げないよう高さが必要だったため、縦断勾配7%の急勾配となる。



スケールに圧倒される 県をまたぐ江島大橋

大根島から江島に渡ると、車のCMで一躍観光地の仲間入りを果たした通称「ベタ踏み坂」、江島大橋が見えてくる。橋桁と橋脚が一体化しているラーメン橋だ。6・1%の勾配は、運転していると思っただけ感じない。その代わり、上部構造の薄い部分でも4mの厚みがあって、橋脚の下から見上げると圧倒される巨大さだ。これならどんなコンテナ船も通れるだろう。この橋を渡り切った先は鳥取県境港市。水木先生の生まれ故郷だ。

江島大橋は弓ヶ浜にある米子空港



▲ 江島大橋
境港市と江島を繋ぐPC5径間連続有ヒンジラーメン箱桁橋。中央径間250mは世界最大級。超大型移動作業車を使用した片持ち架設架設工法で、PCブロックを大型化し素早い施工が可能に。

などへのアクセスを重視し、港湾事業の一環で建設された。宍道湖から中海、境港、そして海外へ。かつては船が担っていた出雲国の交通を、今はPCをはじめとするコンクリートが担っている。

令和に開港！ 国際色豊かな 境夢みなとターミナル

陸路を橋、海外渡航は空の旅がスタンダード化した現代だが、海外への海上航路は今も活発に続いている。海外からの大型貨物船が発着する境港だが、近年は大型クルーズ船の寄港が右肩上がりだった。乗客の乗降に時間をとられ、沖待ちが増えたことから、新

たに国際線ターミナル「境夢みなとターミナル」が整備された。船がつけられる岸壁から工場であらかじめ作っておいたPC桁が張り出し、大勢の人々を受け入れられる広さを確保している。客船から降りた人々が最初に踏みしめる大地がPCだなんて誇らしい。



▲ 和泉(海鮮丼)
元漁師の店主が確かな目利きで仕入れる、新鮮な境港の海の幸を味わえる。分厚い旬の刺身にウニやいくらなどが大ぶりの器に盛られた大漁丼を豪快に。地元客に好評の日替わり弁当も。



◀ 境夢みなとターミナル(境港竹内南地区岸壁)
令和2年4月にお披露目された、大型客船、大型貨物船の受け入れを目的とした国際ターミナル。岸壁の渡板に、プレテンション方式PC単純ホロ一桁を384本使用している。

残念なことにターミナルの開港はちょうど令和2年春、コロナ禍真っ只中で、多くのクルーズ船がキャンセルになった。訪れた待合ホールはしんとした。飛鳥IIなどが少しずつ寄港を再開しているが、入国ゲートには英語、ハンゲル、繁体語に簡体語、ロシア語、アラビア語などが並び、それだけの地域からの来船を予定していたことが分かる。ほんの少し先の未来で、船旅を歓迎する境港の人々の温かい心は、きつと客人たちを喜ばせるに違いない。

せつかく鳥取に来たけれど、日本海と中海をつなぐ境水道を対岸に渡るとそこは島根県。境港の新鮮な魚介で



▲水木しげるロード
「ゲゲゲの鬼太郎」でおなじみのキャラクターをはじめ、全国の妖怪ブロンズ像177体が集結。JR境港駅から妖怪神社、大正川、商店街を越え水木しげる記念館まで続いている。

腹ごしらえをして、駅前の水木先生のブロンズ像に挨拶をしたら、古代から現代へと進めてきた時間を今一度神話に戻し、旅を終わりにしようと思う。

再び国譲りの舞台へ えびす総本宮の美保神社

境水道大橋を渡り島根半島を東へ。雲の晴れ間が見え、夏の透明感ある日本海に向かっていく。急に陸地がえぐれ、漁港にあつらえたかのような湾が現れる。イカ漁が盛んな美保関漁港だ。どれだけ盛んかという点、与謝野晶子や高浜虚子など訪れた歌人・俳人がごぞつて鳥賊の歌を残すくらい。青石畳通りや美保関灯台に残る歌碑をぜひ読んでほしい。

この美保関漁港にある美保神社、



▲美保神社
大国主命の子・事代主命を祀る全国えびす神社の総本宮。遅くとも8世紀には社が存在しそれ以前の出土品も多い。「ご祭神は鳴り物を好む」との信仰があり音楽の奉納が絶えない。

出雲大社と両詣りで縁結びのご利益がアップすると言われている。国譲りを成し遂げたオオクニヌシと、穏便に国を譲るべきだと父に進言したコトシロヌシの絆にあやかるのだから。4月と12月に行われる神事は国譲り神話を再現しているもので、何とか国譲りの内容を正しく残したいという当時の人々の願いが込められているのかしら...と勘ぐってみたり。

美保神社に到着してまもなく、たまたま月次祭の七日えびす祭が始まる。広い拜殿で巫女が鈴を打ち鳴らし、厳かに舞う。ふだんいただく習慣はないのだけれど、巡りあわせを感じてこの日限定の御朱印とお守りを分けていただいた。

いつの時代も無事を願う 地蔵岬の灯台

実は最初、美保関灯台まで足を伸ばすつもりはなかった。けれど神話の時代からずうつと水と戦い、水と生きてきた出雲国の人々の足跡をたどるうちに、日本海に突き出すこの場所へ来ずにはいられなかった。明治に建設された石造りの美保関灯台が、一瞬晴れた青い空と海にいつそう映える。

オオクニヌシが出雲を治める以前から、渡来人との交流があったことは青銅器などの出土品が示している。大和

▼美保之碕(地蔵岬)
国引き神話で北陸から引いたと伝わる岬。崖下の沖之御前・地之御前は事代主命(コトシロヌシ)の魚釣りの鳥として知られ、漁師はこの島影で天候を判断した。美保関灯台は山陰最古の現役灯台。

王朝の遣隋使、遣唐使は九州から出発していたけれど、美保関も行き来は絶えずにあった。松江を発着する渡海船は中世から明治期まで使われていたし、松平家の治世には北前船、現代は世界各地からやってくる大型貨物船やクルーズ船と、外海に出入りするすべての船がこの地蔵岬を回り込んでくる。地名の由来は、船の無事を祈り数多くの地蔵が埋められていたからだという。心もとない装備で漕ぎ出していた古代の切実さとは比べ物にならないけれど、誰かの無事を祈る心は何千年も変わらない。オロチ退治の神話をきっかけに始めた旅だけれど、出雲の神代から現代までをたどれば、より安全に、より心地よく生きていきたいという人の根源的な願いを、皆がずつと紡いでいたように思う。

美保関灯台を後にしようとしたら、急に灰色の雲がやってきて、柔らかな天気雨を降らせた。出雲の神様、ここまで旅のご縁を繋いでくれて、ありがとうございました。





出雲大社
「国旗掲揚塔」(p.2)



布志名高架橋



江島大橋 (p.6)



神戸堰橋 (p.3)



みはらし橋



中海大橋 (p.5)



境夢みなとターミナル
「渡版」(p.6)



神庭谷橋



正善寺橋



新小林橋



木次大橋

山陰

鳥取・島根

旅MAP



志津見大橋 (p.1)



三刀屋高架橋